

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 10 月 14 日現在

機関番号：33109

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26780505

研究課題名(和文) 道德教科化に先駆けた効果的な教育プログラムの開発-役割取得能力による検討

研究課題名(英文) Development of effective educational programs for the moral education :Focusing on role taking ability

研究代表者

本間 優子 (Honma, Yuko)

新潟青陵大学・福祉心理学部・助教

研究者番号：40410253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：研究1では小学5,6年生を対象に役割取得能力(規則および対人場面)とクラス内行動(授業不参加行動,規則遵守行動,向社会的行動)および学校肯定感・回避感の関連について検討した。パス解析の結果,対人場面の役割取得能力が向社会的行動に影響し,向社会的行動が学校肯定感に影響を示すことが明らかとなった。研究2では小学3,4年生を対象に感情解釈能力(喜び,悲しみ,怒り)と役割取得能力,クラス内行動の関連について検討を行った。怒りに対する感情解釈能力得点は,規則場面の役割取得能力の発達段階について有意差を示した。さらに喜び,悲しみの感情解釈能力と授業不参加行動,規則遵守行動に関連が認められた

研究成果の概要(英文)：Study1 examined the relationships among children's role-taking ability (rule, moral) and classroom behavior (non-cooperative class behavior, rule compliance behavior, and prosocial behavior) as well as children's emotions to school (school liking/avoidance).The results indicated that role-taking ability in moral situations influences the prosocial behavior and meanwhile the prosocial behavior affects school liking. Study2 examined the relationships among children's emotional perspective-taking (joy, sad, anger) and role-taking ability (rule, moral) and classroom behavior (non-cooperative class behavior, rule compliance behavior, and prosocial behavior). The results indicated that emotional perspective-taking in anger relationship between role-taking ability in rule. Further, the relationship between emotional perspective-taking in joy and sad among non-cooperative class behavior, rule compliance behavior was evaluated.

研究分野：発達心理学

キーワード：役割取得能力 感情解釈能力 学校適応 児童 道德教育

## 1. 研究開始当初の背景

学校現場において、いじめ、学級崩壊など子どもの学校適応に関する様々な問題は長年取り上げられ続けている。

不適応行動を抑制し、学校適応を促進する要因の1つとして、役割取得能力を挙げることができる。役割取得能力とは、他者の知覚、感情、思考を自己の立場からだけでなく、他者の立場からも理解する能力である (Selman, 1976)。

文部科学省はいじめ解消につなげることを目的とし、「他者理解や思いやり、規範意識」などを育むために道徳の教科化を提言しており、2018年度から道徳は、小学校では正規の科目となる。役割取得能力は道徳性の向上に関係する能力であり、役割取得能力の向上が道徳性の向上につながる (荒木, 1988)。このことから、道徳教育を効果的に行うには、授業内容に役割取得能力に関する課題を含むことが必要であると考えられる。しかしながら、含まれていない。役割取得能力課題を含むことの必要性を提言するには、役割取得能力と学校適応の関連を示し、予想される効果を示すことが必要である。そこで、本研究では道徳の教科化に先駆け、役割取得能力と学校適応の関連について検討を行うことで、道徳の教科化に先駆けた、効果的な教育プログラムを検討することとした。

プログラムの検討にあたり、年齢に比して通常役割取得能力の発達を示す児童に対する検討に加え、年齢に比して役割取得能力の発達段階の低い児童についても考慮が必要である。感情解釈能力とは、「他者の内的状態である感情を推測する能力」と定義され、役割取得能力の下位要素と考えられている (伊藤, 1999)。伊藤 (1999) より、感情解釈能力は、役割取得能力の先行要因である可能性が示唆されている。子のことから、役割取得能力の発達段階が同年齢の子どもより低い児童については、役割取得能力よりも、感情解釈能力に関する介入を行う必要があると考えられる。そこで、本研究では役割取得能力の低い児童へのクラス内行動改善のための介入プログラムについても検討するために、感情推測能力と役割取得能力の発達段階の関係を明らかにし、それをふまえた上で、クラス内行動との関連についても検討を行うこととした。

## 2. 研究の目的

(1) 研究1として、役割取得能力が学校適応に及ぼす影響を明らかにする。役割取得能力と学校適応の関連を明らかにすることで、道徳授業等で役割取得能力課題を用いて児童にトレーニングを行う根拠となる。

(2) 研究2として、役割取得能力の下位能力であることが示唆されている、感情解釈能力 (嬉, 悲, 怒) と役割取得能力の関連を明らかにし、それをふまえた上で、学校適

応との関連を明らかにする。(2)を明らかにすることで、役割取得能力の発達段階の低い児童に対する、効果的な介入方法を検討することが目的である。(1), (2)を調査研究により明らかにすることで、効果的な道徳教育プログラムについて考察することを本研究の目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 研究1: 役割取得能力が学校適応に影響を及ぼすプロセスの検討

公立小学校の5, 6年生に在籍する児童82名を対象とした。調査内容については、役割取得能力 (規則および対人場面, 本間・内山 2003b), 教師によるクラス内行動の評定 (授業不参加行動, 規則遵守行動, 向社会的行動), 児童評定による学校肯定感・回避感について質問紙調査を行った。教師評定によるクラス内行動測定課題としては、本間・内山 (2005a) で作成された教師によるクラス内行動評定尺度より、授業不参加行動 (3項目), 規則遵守行動 (3項目) を用いた。さらに、向社会的行動について、Interpersonal Competence Scale-Teacher (Cairns, Leung, Gest, & Cairns, 1995) より、向社会的行動 (4項目) を用いた。両尺度とも回答方法は5件法であった。児童評定による学校肯定感・回避感については、Ladd & Price (1987) の SLAQ を翻訳した日本版学校肯定感尺度 (児童用 SLAQ; 大対・堀田・竹島・松見・Ladd, 2006) より全ての下位尺度である学校肯定感 (9項目), 学校回避感 (5項目) を用いた。回答方法は5件法であった。

(2) 研究2: 感情解釈能力と役割取得能力、および学校適応の関連

公立小学校の3, 4年生に在籍する児童であった。129名を対象とした。調査内容については、感情解釈能力課題として、山田 (2010) の状況課題を各感情 (喜び, 悲しみ, 怒り) につき、それぞれ1題ずつ使用した。課題は主人公の表情のない4コマ漫画であり、それぞれの感情に基づくストーリー展開となっている。回答方法として、主人公の感じた感情について①どんな感情を感じているか②どうしてそう思ったか の2点について自由記述で回答を求めた。

評定方法は0点 (設定した感情を理解していない), 1点 (ある程度理解している, 類似の感情は述べているがうまく言語化できていない), 2点 (良く理解している) の3件法であった (山田, 2010)。役割取得能力および教師評定のクラス内行動については、研究1と同様の課題を用いた。

## 4. 研究成果

(1) 研究1: 役割取得能力が学校適応に影響を及ぼすプロセスの検討

Table 1 変数間の相関係数および偏相関係数

	規則場面	対人場面	授業不参加行動	規則遵守行動	向社会的行動	学校肯定感	学校回避感
規則場面	-						
対人場面	.25*	-					
授業不参加行動	.01	-.04	-				
規則遵守行動	-.14	.01	-.38**	-			
向社会的行動	.05	.37**	-.31**	.42**	-		
学校肯定感	-.07 [-.06]	.09 [.14]	-.17 [-.03]	.35** [.21†]	.34** [.26*]	-	
学校回避感	-.01 [-.03]	.05 [.10]	.33** [.21†]	-.33** [-.17]	-.23* [-.05]	-.55**	-

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

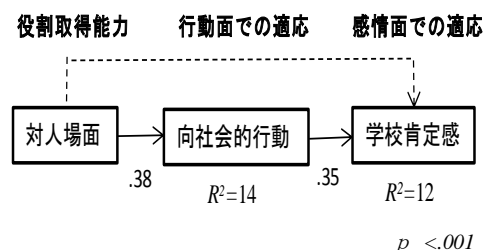
note : [ ]内のイタリックの数値は、学校肯定感および学校回避感を統制した際の偏相関係数

役割取得能力(規則および対人)、クラス内行動(授業不参加行動、規則順守行動および向社会的行動)、児童評定の学校肯定感・回避感得点について相関係数および偏相関係数を算出したところ、以下のような関連が示された(Table1)。

これらの結果を参考に、対人場面の役割取得能力がどのようなプロセスを得て学校肯定感に影響を及ぼしているか、パス解析による検討を行った。モデルについては、役割取得能力からクラス内行動へのパス、そして、それを經由して学校肯定感につながるパス(モデル0)、ならびに、役割取得能力から学校肯定感へのパス、それを經由してクラス内行動につながるパス(モデル1)の2つについて検討を行った。

有意でないパス係数を削除した後、それぞれのモデルについて適合度を検討した結果、モデル0は $\chi^2(1) = .07, n.s.$ であり、真のモデルであることが示された。GFI=.99, CFI=1.0, AGFI=.99, RMSEA=.00, AIC=10.07であり、良好な適合度指標を示した。他方、モデル1については $\chi^2(1) = 11.59, p < .001$ であり、 $\chi^2$ 検定が有意であることにより真のモデルではないことが示された。適合度指標についてもGFI=.91, CFI=.45, AGFI=.51, RMSEA=.36, AIC=21.59であり、適合度指標もモデル0より低かったため、本研究ではモデル0を採用することとした。次に、モデル0の分析結果について、各々の変数間の影響についてもう少し詳しく検討することとした。対人場面の役割取得能力からの直接効果としては、向社会的行動に正のパスが示された( $R^2 = .14, \beta = .39, p < .001$ )。対人場面の役割取得能力から直接的に学校肯定感への有意なパスは示されなかった。そして、行動面での適応を示す向社会的行動から、感情面での適応である学校肯定感に有意なパスが認められた( $R^2 = .12, \beta = .34, p < .001$ )。これらの結果から、対人場面の役割取得能力から、

向社会的行動を介した学校肯定感への間接的なパスが示された( $\beta = .38 \times .35 = .13$ )。これらの結果から、対人場面の役割取得能力が高まることで向社会的行動が高まり、向社会的行動が高まることで、学校肯定感が高まるという、役割取得能力が学校適応に影響を及ぼすプロセスが確認された(Figure1)。



Note: 単方向の実線矢印は標準化係数、点線は有意でなかったパスを示す。

Figure1. 役割取得能力が学校適応に影響を及ぼすプロセス

(2) 研究2:感情解釈能力と学校適応の関連  
感情解釈能力課題について、喜び、悲しみ、怒りについて各々得点の分布を示す(Table2)。「怒り」については「喜び」「悲しみ」よりも理解できている子どもは少ないことが示された。

Table 2 感情解釈能力課題の得点の分布

得点	喜び	悲しみ	怒り
0	6 (4.7)	11 (8.5)	61 (47.3)
1	4 (3.1)	10 (7.8)	27 (20.9)
2	119 (92.2)	108 (83.7)	41 (31.8)

note : ( ) はパーセンテージを示す

感情解釈能力得点(喜び, 悲しみ, 怒り)と役割取得能力(規則および対人場面)の

発達段階の関連について検討を行うため、Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果、「怒り」に対する感情解釈能力のみ、規則場面の役割取得能力の発達段階と有意差が認められた ( $\chi^2=6.72, df=2, p<.05$ )。対人場面の役割取得能力については、有意差は認められなかった ( $\chi^2=1.01, df=2, n.s.$ )

次に、感情解釈能力とクラス内行動との関連について検討を行った。喜び、悲しみの感情解釈能力については、授業不参加行動 ( $\chi^2=7.09, df=2, p<.05, \chi^2=7.40, df=2, p<.05$ ) および規則遵守行動について関連が認められた ( $\chi^2=5.02, df=2, p<.10, \chi^2=6.86, df=2, p<.05$ )。他方、規則および対人場面の役割取得能力とクラス内行動の関連について検討するため Kruskal-Wallis 検定を行ったが、両者の関連は認められなかった。

本研究から、子どもの規則場面の役割取得能力の促進には、子どもの「怒り」に対する理解に焦点を当てたプログラム作成の有用性の可能性を示唆した。そして、感情解釈能力についてはクラス内行動とも関連することが示された。本研究で得られた知見は先行研究(本間・内山; 2005a)とは異なり、児童期後期より役割取得能力の発達段階が相対的に低い、児童期中期では役割取得能力ではなく感情解釈能力がクラス内行動と関連することが明らかとなった。

### (3) 道徳教育プログラムへの提言および今後の展望

研究1より、役割取得能力が学校適応に影響を及ぼすプロセスが確認された。本研究では、向社会的行動について、「他の子どもを励ますことがある」、「他の子どもを助けることがある」、「他の子どもに親切である」、「他の子どもに友好的である」という項目で測定したが、対人場面の役割取得能力を高めることで、教室内で向社会的行動が増加すれば、いじめという不適応行動は減少していき、その結果、学校肯定感が高まることが予想される。本研究で得られた知見は、いじめ防止に役立つと考えられ、教育的意義が高いと言える。また、道徳教科化という時流の流れにもマッチしており、社会的意義も高いと言える。実際に道徳授業を通して役割取得能力を高めるには、6回連続のトレーニングにより、役割取得能力が高まることが明らかにされている(金城, 2012)。今後は実際に6回連続のプログラムを行うことで、効果を確認していきたい。

また、研究2より、怒りに関する感情解釈能力が、規則場面の役割取得能力と関連することが示された。怒りについては、他の感情と異なり、小学3,4年生では理解できる子どもが少ないことが明らかとなった。これらのことをふまえると、怒りについて

の感情をきちんと理解できるようになることが、規則場面の役割取得能力を高めることにつながると考えられた。さらに、小学3,4年生においては、役割取得能力ではなく、喜び、悲しみの感情解釈能力が学校適応と関連することが示された。小学5年生を対象とした先行研究(本間・内山, 2005a)とは異なる結果であり、本研究では、役割取得能力よりも、その下位能力とされる感情解釈能力の方が、学校適応と関連することが示された。本研究および本間・内山(2005a)ではそれぞれ対象校は1校であったため、今後も他校でデータを収集し、知見を確認することが必要である。しかしながら、怒りの感情解釈能力が高い子どもほど、規則場面の役割取得能力の発達段階が高いという知見は、役割取得能力の低い児童に対し、介入を行うにあたり有益な知見である。今後は実際のプログラムの実施を行い、効果を確認していきたい。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

1. Honma, Y., & Uchiyama, I (2016a). The Relationships between Role-Taking Ability and School Liking or School Avoidance: Rule and Moral Situations. *Comprehensive Psychology*, **5**, 1-11. 査読有り.

2. 本間優子・内山伊知郎 (2016b) 教師評定版 SLAQ (School Liking and Avoidance Questionnaire) 日本版の作成. *道徳性発達研究*, **10**, 69-73.

[学会発表] (計 3 件)

1. 本間優子・内山伊知郎 (2015a) 児童期後期における規則・対人場面の役割取得能力とクラス内行動、学校肯定感・回避感の関係 第23回日本感情心理学会 東京.

2. 本間優子・内山伊知郎 (2015b) 児童期中期における喜び・悲しみ・怒りの感情解釈能力(感情的視点取得能力)と規則および対人場面の役割取得能力とクラス内行動の関係 第57回日本教育心理学会 新潟.

3. 本間優子・内山伊知郎 (2015c) 児童期後期の役割取得能力が学校適応に影響を及ぼすプロセス 第15回日本道徳性発達実践学会 京都.

[その他]

研究成果の社会的還元を目的とし、ホームページを作成した。

URL: <https://yukohonma.localinfo.jp/>

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者 本間 優子  
(HONMA YUKO)

新潟青陵大学・福祉心理学部・助教  
研究者番号: 40410253